

<書評>

佐藤一子・大安喜一・丸山英樹編著

『共生への学びを拓く SDGsとグローバルな学び』

エイデル研究所 2022年4月

岡田耕治（大阪教育大学）

本書を手にした時、重いなと感じた。しかし、鞆に入れて読み進めるうちに、その重さは柔らかな軽さに変わっていった。それはこの本の編者や著者が、それぞれの専門分野の知見にとどまらず、自分の活動フィールドがあって、そこから世界を見ている、まさにグローバルなまなざしのなせる技かも知れない。

〈本書のねらいは、さまざまな格差を是正し、「誰一人取り残さない」状態を実現するため、国際的視野を持ちつつ地域から「共生への学び」を創造的に追求する主体の形成過程を明らかにすることである〉と、佐藤一子さんははじめ編者の方が述べている。本書の内容は、①持続可能な地域づくりとコミュニティ教育、②生きづらさを抱える子ども・若者の自立支援と社会参加、③多文化共生社会への模索と国際交流、④グローバル時代の平和・人権学習、文化多様性とシティズンシップ教育と大きく次の4部で構成されている。

各部で注目したところは、①持続可能な地域づくりとコミュニティ教育の部分では、大安喜一さんが、バングラディッシュやタイでどのようにこのコミュニティの中での学びを実現しているかという例を紹介している文章である。その上で、大安さんがフィールドとしている岡山市の公民館が、地域の人々と対話を通して課題を見つけ、解決の方策を考え、地域の学校や商店街とつながりを作っていく役目を果たしていく事例を挙げている。現在、私の在住する大阪では、公民館がどんどん民間委託されて、本来の公民館活動が先細って行く状況だが、学びを通じた持続可能な社会づくりの可能性を示してくれた。

②生きづらさを抱える子ども・若者の自立支援と社会参加では、実際に子ども・若者の自立支援に携わっている佐藤洋作さんの文章に刺激を受けた。佐藤さんは、実際にフリースペース「コスモ」やベーカリー「風のすみか」の運営をしている。子どもや若者が学びやすい居場所、また若者が働きやすい職場を実際に作るができるという具体的な実践は、読む者を力づけてくれる。多くの学びの場や職場では、効率化が求められ、時間をどう有効に使うのかということが課題になっている。この流れに乗れるか乗れないかでその人の価値が決まってしまうという、緊張の高い勤め方を強いられているのだ。しかし、「風のすみか」では、失敗してもいいんだよ、あなたはあなたでいいんだよという、心理的安全性を保ちながら、安全でおいしいパンが作られている。そうすることによって、地域の人から信頼され、喜ばれるパン屋が生まれ、そのパン屋のメンバーの一員であるというこ

とに、自ら自信を持っていく。そのような働き方が可能なのだという具体的な実践は、希望そのものだ。

③多文化共生社会への模索と国際交流では、『共生社会』創造を目指した外国人移住者との地域日本語学習活動」という山田泉さんの文章に着目した。私は、大阪教育大学において、ボランティアの皆さんとともに地域の方々が読み書き・ことばを学習する場を運営しているので、山田さんの提起に肯くところが多くあった。特に、外国人住民がボランティアとともに学び合い、「地域を共生社会としていく主体となっていく」ことが重要だという指摘がそうだ。また、ボランティアがそのことに注力できるよう、国や地方公共団体が「日本語運用能力を獲得する」ための地域日本語教室を整備すべきという主張も、そのことが実現すればいぶん学習の場の混沌や対立も整理されると感じる。山田さんが「社会的学び」と呼んでいる学びは、日本人と外国人が共に学ぶことによってよりよい社会をつくっていかうとするものである。その実現のためには、これまで積み上げてきたボランティアによる読み書き・ことばの学習とともに、国や地方自治体の役割は大きい。そのような意味で、金侖貞さんが『社会統合』に向けた学びの保障とは』で紹介している韓国多文化教育は、日本にも取り入れていきたい教育施策が多く含まれている。

本書の特徴として、主要な文章のテーマに沿って、10編のコラムが挟まれていることが挙げられる。これによって、各部のメッセージが重層化されていく。コラムの中では、添田祥史さんが挙げている夜間中学の学習者の言葉が、ダイレクトに私の中に入ってきた。〈親を恨んでも問題の解決にはならないことを、親の後には、社会の大きな流れがあることを、学びました。そして救われました〉。このような言葉を紡ぐことのできる学びを是非実現したいと思った。

④グローバル時代の平和・人権学習、文化多様性とシティズンシップ教育の中では、新藤浩伸さんが「学習の自由・表現の自由・文化多様性を育む博物館」の中で、ニューヨーク市立美術館やブラジル国立歴史博物館を紹介している。特に、ブラジル国立歴史博物館の展示の最後に暗い展示室を出る自動ドアがあって、その大きな鏡に来館者自身が映し出される。その鏡には、「歴史とはそれを創るあなたのことです」というポルトガル語が書かれている、と。本書は、全巻を通してSDGsの目標達成とグローバルな学びをどう実現するのかというテーマで貫かれているが、この鏡は、その取り組みの原点にあなたが立っているのですよと呼びかけているようだ。社会教育施設というのは、この社会において当事者である人と人とをつなぐ場なのだと、改めて思わせてくれた。

一人ひとりが、人生の当事者であり、未来は今なのだ、それが歴史なのだというメッセージは、本書を一貫して通底しているように思う。本書を手にしたとき、こんなにも様々なことを考えなければいけないのかという重さを感じた。けれども、鞆の中で次第にその重さを感じなくなっていったのは、私なら私のフィールドで出来ることに取り組み、そこから世界を見ていく、SDGsの目標に向かっていく、それでいいのだと思えるようになった

たからだろう。最後に丸山秀樹さんが書いているように、本書で取り上げられているテーマだけでなく、ジェンダーに関する課題や世代間格差の課題など、様々な課題がある。けれどもすべての始まりに私があると気づき、この私を力づけてくれる一巻である。